

第13回 安佐動物公園・植物公園・こんちゅう館 研究活動発表会のお知らせ

(公財)広島市みどり生きもの協会の安佐動物公園、植物公園、森林公園こんちゅう館は、日ごろの調査研究活動を広く市民の皆様にご覧いただくため、合同で発表会を開催します。

最新の情報を担当者から直接お伝えしますので、ぜひお聞きください。

- 1 日 時 平成29年2月8日(水) 14:00~16:00
- 2 会 場 広島市役所2階講堂(広島市中区国泰寺町一丁目6番34号)
※駐車場に限りがあります。公共交通機関を利用してお越しください。
- 3 申 込 当日、会場にて受け付け
- 4 発表内容

(1) 広島市安佐動物公園でのシロフクロウの飼育と人工繁殖例

発表者：広島市安佐動物公園 飼育・展示課 技師 林 臨太郎

シロフクロウ *Bubo scandiacus* は北極圏のツンドラ地帯で繁殖し、越冬の際にはユーラシア大陸や北アメリカ大陸の亜寒帯地域、時には日本を含むアジアまで南下するとともに広い範囲に分布するフクロウです。若鳥や雌は体に斑紋がありますが、雄の成鳥の羽は純白で、フクロウ類では珍しく外見に雌雄の差がはっきりと見られます。

広島市安佐動物公園では1986年からシロフクロウの飼育を始め、1994年に自然繁殖に初めて成功しています。近年では、2015年6月に16年ぶりに1羽の雛が自然繁殖により誕生しましたが、この雛は同年8月に死亡しました。そして、2016年、再び雌が産卵し、抱卵をしましたが、孵化予定日の直前に抱卵していた雌が死亡しました。そのため、直ちに6個の卵を回収し、人工孵卵を行いました。その結果、2羽の雛が孵化し、人工育雛を行いました。この2羽はそれぞれ雄と雌で、順調に成育しました。

今回は、2羽の人工孵卵・育雛によって得られたデータを、雛の体重増加量、採食量、形態変化の過程、また雄と雌の差に着目してまとめた内容と、安佐動物公園でのシロフクロウ飼育についてお話しします。



抱卵中の雌親



孵化後2日の雛

(2) 生物多様性の啓発をねらいとした「広島県のゲンゴロウ」展について

発表者：広島市森林公園昆虫館 技師 藤井 智展

平成27年度の秋の企画展示では、広島県の生物多様性と、その多様性が失われつつある現状を伝えることを目的とし、「広島県のゲンゴロウ」展を行った。ゲンゴロウ類は全国で約120種が知られ、そのうち広島県では42種が確認されている。止水や流水の中にすむという生息環境の特殊性から、ほかの昆虫種に比べて広島県のレッドデータブック掲載種の多い種群である。

広島県の生物多様性の豊富さを目で伝えるため、できるだけ多くの種類を生体展示することをめざし、県内42種(うち2種は絶滅)のうち38種を生体で展示した。また、今、それらのゲンゴロウ類が、生息

環境の変化により現在進行形で減少しつつあるという現状をパネルや講演で解説した。

ゲンゴロウ類は大型のものもいるが、ほとんどが5mm以下の小型の種であるため、それぞれの形態や体色、模様のちがいが、動きのちがいが判りやすく見えるようにレンズ効果のある円筒形のガラス管瓶を展示ケースに用いる展示手法を行った。さらに、拡大した標本写真を展示ケースの横に配置するなどの工夫を行った。

この展示のアンケートでは「多くの種類がいるとは知らなかった」などといった声が聞かれ、来館者に対して広島県の生物多様性への興味関心を高める効果があった。

この展示の準備を通して、県内でのゲンゴロウ類の採集を行い、昆虫館職員自身も、生息地の破壊や荒廃などといった、県内のゲンゴロウ類のおかれた現状を改めて把握することができた。

今後、継続的に調査を行い、県内のゲンゴロウ類の生息状況を確認するとともに、県内のゲンゴロウ図鑑などとしてまとめ、残していくことが課題である。



ムツボシツヤコツブゲンゴロウ



ムツボシツヤコツブゲンゴロウ・
キボシツヤコツブゲンゴロウ生息地



会場全体の様子

(3) 南アフリカ原産の球根植物<ラケナリア>の類縁関係を探る

発表者：広島市植物公園 栽培・展示課 第二栽培・展示係長 濱谷修一

ラケナリア (*Lachenalia*) はキジカクシ科に属する南アフリカ原産の美しい球根植物で、100以上の種が知られ、今もなお、新しい種が報告されています。これまでに長い年月をかけて種分化を繰り返し、現存する種数に至っているわけですが、その結果、同じラケナリアであっても、互いに近縁のもの、遠縁のものが入り混じっています。類縁関係を知る(推測する)ことは、その植物の種分化の流れ(進化の歴史)に思いをはせるというロマンがあるとともに、主に園芸利用を目的とする品種改良の効率を高めるという効果があります。

私たちは、これまで20数種のラケナリアを材料として染色体の観察やDNAの塩基配列の調査を行うことによってそれらの類縁関係を探り、ラケナリアの種分化には一つではなく複数の流れがあることを示しました。その一方で、私たちの結果だけでなく他の多くの研究者による結果と合わせて考えても種分化の流れが判らない部分も未だ残されており、今後の研究の課題となっています。

この度の発表では、この研究に取り組むきっかけとなったラケナリア・プシラという種を中心にしながら、研究の成果をご紹介します。



ラケナリア・プシラ



ラケナリア・ムタピリス



ラケナリア・ルビダ